
短編・恋愛・オリジナル

ハツ原八重

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編・恋愛・オリジナル

【Nコード】

N3359S

【作者名】

八ツ原八重

【あらすじ】

ちよつとした恋愛小説

「今日さ、3組の男子で、1組と3組の女子で誰が一番可愛いかって話があつただけだよ」

商店街のマツクの階段を上り、トレーを置くと上岡はそういった。

「へえ、明日3組の女子にそのこと言ってやるオー。上岡が先導したとも付け加えて」

「おい、早速暴露しようとするなよ」

「東谷のことだからどうせ忘れるって。というか何で1組と3組なん？」

その上岡の隣に座った倉沢が先を促す。

「あ、1組と3組って体育合同だからですか？」

「そう。あ、築瀬は話し始めた時、近くにいたもんな」

「築瀬も話に参加したのか？」

女性雑誌モデルのような中性的な顔立ちの築瀬がいう。

「いえ、人の顔覚えるの苦手で…聞いてただけです」

「で、誰が一位だったと思う？」

「え、築瀬とか？」

「ひ、ぼくですか」

半ば本気でいうと、ハスキーな声で悲鳴を上げる女顔の築瀬。

「女子だって言ってるのに何でメンズが一位だよ。築瀬ならあり得るけど」

3人で怯える築瀬の顔を見る。先日学校祭のときに女子の制服を着させられたのを思い出す。

「築瀬じゃないなら、フツーに中瀬じゃないの？」

「おー、正解正解」

男に生まれたのが悔やまれる顔から眼をそらし、倉沢が答える。

「やっぱり分かるかー」

「そりゃあね。うちのクラスの人ほとんど好きなんじゃない？女

子も含めて」

「えー、そんなモテんの？」

残念そうに言う。

「小顔でかわいいし、髪はさらさらできれいだし、聞き上手だし。当然でしょ」

「あ、学校祭のとき、すごい同時に4人に告られたって人ですか？」

「お、築瀬でさえ知ってる」

「何というか、おしとやかな人ですよ」

「うん。前は地味…じゃなくて目立たないなほうだったけど」

「そう。夏休み明けたらすげえかわいいのがいたからびっくりした。転校生かと思った」

「眼鏡からコンタクトになったし、髪型も少し変えたっぽいね」
思い出しているのか、両の黒目を左上が移動する。

「しかも料理部で、お菓子作りとかうまいんだろ。あーあ、こんなことならもつと話しかけときゃよかった」

「お前、どうせ別のクラスじゃん」

一応訂正を入れる。

「何だっけ？男を惚れさすには料理が一番ってという言葉があるじゃん」

「ああ、男心を掴むならお袋を掴むべしってやつ？」

「お袋じゃなくて胃袋だと思います」

「いや、子供の見合いに親が出張ってくる時代だし。案外当たってるかもだぜ」

「それはそれで恐いなー」

倉沢の間違いを律儀に正す築瀬におれは悪乗りする。

「そうじゃなくて！だから料理ができる女の子はいいよなってこと。だから中瀬もいいよなってこと」

「おれ、学校祭でクッキーもらった」

「はあ？死ねよ！」

上岡が血相を変えて不吉なことを言う。

「待て待て、クラスの女子と、結構仲いい男子数人はもらってたよ」
「東谷は？」

「もらってねえよ」

もちろん味方はしない。

「証言は得られなかった。判決、倉沢は次のマックみんなの分おくれ」

「拒否する。あ、そういえば東谷、中学のとき告られたことあるじゃない」

「ここでおれに話を振るな」

「え、そうなんですか」

「生意気な…お前もおごり決定」

「拒否する。それに知らないやつだったから断ったよ」
苦い表情になったのが自分でも分かった。

「そうそう！なんだっけ、バレンタインの日に東谷、別のクラスの子からチョコレートもらったんだよ。でもこいつチョコレート苦手だし、そのうえ『知らない人から言われても困んだけど』とか言ってるってガン飛ばして泣かせちゃったんだ」

人の不幸はなんとやら。嬉々として倉沢が語る。

「うわー…東谷くんらしいですね」

「最悪。やっぱおごれ」

「だってあつちは2人？だったか3人だったかで徒党を組んで来るんだぜ？その後『女の敵！』みたいな扱い受けるしよ」

「人数は関係なくね？」

「なんかイラつときたんだよ、子供みたいで」

多分、と頭の中で付け足した。あまりよく覚えていないのだ。

「それと、そんなに中瀬が気になるなら倉沢に紹介してもらえば小中同じだから」

腹も減っていたので、倉沢に話を振って湿ったチーズバーガーの包装を剥がす。

「いや、小中って言ったなら東谷も同じじゃん」

「それは… 幼馴染ってやつですか」

「築瀬、話を聞いてくれ」

「えー幼馴染じゃん。いいなー」

「お前も話聞けよ」

「へえ、どんな感じだった？」

「さあ… 中瀬って名前自体覚えてないんだよね、よく。東谷は？」

「高校デビューってやつでしょうか」

「多分。高校入ってはじめての頃自己紹介があって、その時初めて同じ中学って知ったくらいだし」

「そう言ってマックポークに食いつく。」

「よく覚えてるな倉沢は。特に女子」

「倉沢チャライからー」

「はあ？おれチャライくないし」

「上岡はお前が羨ましいんだよ、モテるから」

「別に羨ましくねえし！」

「あ、そうなの。じゃあ他校の子とかを紹介とかもしなくてもいい？」

「すいませんうそです羨ましいです」

「上岡くん…」

築瀬が中性的顔立ちで力なく笑う。

「ジャニーズ遺伝子を持つ築瀬には分かんねーよおー」

わけのわからないことを言って頬杖をつき、

「ああ、彼女欲しい」

とこぼす。

「おれならこんなチャラ男と違って大事にするのになあー」

「指差さないでくれよ」

突き出す指を倉沢は振り払う。

「でも上岡くんはかなり一途そうですね」

「そう。おれ一途なの。尽くすタイプだから」

「ああ？絞り尽くすとか？」

「おれはヒモかよ」

「いや彼女いないからヒモ以下だろ」

「ほんと、東谷の言葉ってほんとによく冷えた刃物みたいだよな」
涙腺から水が零れないように天井を見る上岡。

「あー… 築瀬とかは彼女の前だと性格変わりそうだよな」

その肩をさすりながら倉沢は築瀬に話を振る。

「普段と真逆でDSになるとか」

「な、なりませんよ」

「確かに。女王様みたいになったりすつかもな」

「えゝ、じゃ、じゃあ倉沢くんはどうなんですか」

「おれ？おれはあんま変わらないよオ」

「そうだな」

ポテトを口に運ぶ、倉沢に同意する。

「こいつ、ホストみたいに手慣れてるから」

「例えがひでえー」

「嘘じゃねえだろ」

「東谷くんは、どうなるんでしょうね」

想像しにいですけど、と申し訳なさそうに言う。

「さあなあ」

「おれはあんまり変わんないと思うな」

倉沢が頬杖をつく。

「中学から一緒だけど全然変わってないし。女子にも男子にも同じ態度だし」

「いや、こいつこんなこと言ってぜってーでれでれになるな」

眼球保湿液を引っ込めた上岡がここぞとばかりにおれに弓を引く。

「友達の前ではなんでもないように振る舞いながら、きつと二人きりのときは赤ちゃん言葉でとか喋るんだよ。『まだ一緒にいたいでちゅー』とか」

「上岡。キメエ」

おれは正直な心で言葉を送った。

「東谷くんに限ってなさそうですけど」

「いや、なる。つか、そうなれ。そして破局した時に情けなく泣き喚けばいいのさ」

そう言つて上岡はポテトの先でおれを指す。

「赤ちゃん言葉はいいとしても、お前の期待にだけは応えたくねえ」

「でも、中瀬つてフリーだよな。彼氏出来たらどうなんだろ」

「そりゃ、相手次第だろ」

「例えばおれだと？」

「不幸になるな」

「リングか」

「上岡くん、それ以上言うത്妄想罪で捕まりますよ」

「築瀬まで！想像するだけなら捕まりませんー」

そつだなあ、とわざとらしく腕を組む上岡。

「ドジっ子だったりして」

「そんな人本当にいるんでしょうか」

「いたとしたら確信犯だな」

「でもみんなの前と彼氏の前とで、ギャップはありそう」

倉沢がストローをかじる。

「ギャップか。じゃああれできんじゃん、あれ。『べ、別にあんたのために作ってきたんじゃないんだからね！』的な。料理得意なんだろ」

「料理得意なだけでそんなイタイ扱いされたんじゃないやまんねーだろ」
「じゃあ、攻撃的になつたりするんでしょうか？女王様とかみたい
に」

「それは築瀬だろ」

「だから違いますってえ」

築瀬が昔絶滅した奥ゆかしい女性みたいに頬を赤くするので、揃つて嘖き出した。

それからしばらくしたある日の放課後、そんな女々しい築瀬がおれ

に手紙を差し出した。

おれはもちろんあの日マツクで言ったことをすっかり覚えていて、上岡主導で女子のランク付けをしていたということを言いふらしたことが原因ではじまった上岡の株の下落がそろそろおさまったであろう、今日の放課後のことだ。

「あの…これ」

そういつて隣で帰り支度を待っていた築瀬が手紙を差し出した。視線は左下へ泳ぎ、床の上を彷徨っている。

クラスに残る他の人の視線を感じた。気のせいか、はしやぎ出す女子の声も聞こえた。

ハートのシールで封された封筒を受け取るとおれは言った。

「築瀬。おれはな、女の子が好きだから。もしそーいう内容なら断る」

「え？」

視線を合わせるがときよとん、とした様子の築瀬。

「え、あ、あー違います違います。ぼくのも、ぼくからのでもないですよ」

何かを察したのか高い声を上げるが、すぐに手を口元に添え小声で言う。

「これ、東谷くんのです。今机から落したんですよ」

「ああ、そういうこと」

手紙があつたとは気付かなかった。

「でもここで渡すなよ。びっくりする」

しかも女顔の築瀬ならなおさらだ。

「あ、すいません。でも驚いてるようには見えませんでしたけど」

「そりゃどーも」

裏面に書かれたおれの名前を確認し、ペリ、とシールをはがす。

「え、開けちゃうんですか」

「開けなきゃ読めないだろ」

「そうじゃなくて」

築瀬は目で周りを見渡ように促す。

手紙に気付いた何人かがこっちを見ていたが、眼が合うとすぐさま逸らした。

逸らさなかったのは倉沢のみで、何事かと鞆を肩にかけ近づいてきた。

「後にすつか」

ブレザーのポケットに封筒を入れる。一応丁寧に入れようと思ったが、封筒がポケットの形に歪んだのが分かった。

まあいいか。

「どうしたんだ、東谷」

倉沢が寄る。

「何もねーよ。築瀬を口説いてたらふられたんだ」

「そんな話、してませんけど」

「そりゃふられるだろー」

封筒を庇うように鞆を持ち直し、倉沢と築瀬と教室を出た。

手紙を空けたのは家に着いて、ジャージに着替えて、ケータイがないことに気づき、鴨居にかけた制服のブレザーを漁っていたときに見つけてからだ。

『どうしても尋ねたいことがあります』

ファンシーな封筒から出てきたのはレシート大程度の大きさの網掛けされたメモだった。

メモにはその一言と、今日の日付と場所、時間の指定が書いてあった。

指定の場所は体育館裏。

指定の日は明日の放課後。

ベタである。

明日シフトが入っていたりしたら書いた奴はどうするつもりだったんだろうか、とか考えたが、とりあえずバイトに行くことにした。

「え、行かなかったの？」

茶の混じった髪をポニーテールにした橋川が胡散臭いくらい目を見開いた。

掃除中のことである。

同じクラスのこの橋川という女は手紙を受け取るところを目撃していたらしく、素直に好奇心を見せつけるようにして訊いてきた。

その橋川に今答えた通り、あの手紙の呼び出しには応じなかった。指定の日の前、つまり手紙をもらったその日のバイトに出た時、明日急だがシフトを代わってくれとバイト先の先輩に頼まれたからだ。夏休みの頃、よく代わってもらったので断ることはできなかったというもある。

こんなベタな方法で男を落とせると思っているようなやつ算段に乗るのは気が進まなかったというのもある。

「それにクリスマス直前に告るとか、絶対一人で過ごすのがいやなだけだろ。明らかにノリだろ」

「えー、でも一応行かない？」

「だからバイトが入ったんだって」

「乙女心を踏みにじるとか、最悪」

まるで手紙の送り主になったみたいになんか非難する。

「おれは、呼び出された方だぞ」

「手紙で体育館裏へ呼び出され、告白される。男が歓びそーなシチュエーションだと思うけど」

嬉々と言う。

その決め付けた考え方を見据えたように言うのがさすがに気に障った。

「おれのことはいいだろ…それよりお前らは？」

できる限り嫌味を込めて言う。

「お前らはクリスマスまでもつのか？そろそろ別れ時じゃねーの？」
「残念でしたー。らぶらぶですうー」

嬉々と言う。

「そりや残念だ。別れたら言えよ。祝ってやつから」

「別れたらねー」

橋川はそういいながら黒板消しを目の前を近づけて激しく叩き、おれの呼吸器官へ攻撃をすると教室へ戻った。

そしてしばらくして、クリスマスイブを迎えた。

今年はイブが金曜日ということもあって店は目が回るほど忙しかった。

絶え間なく機械から吐きだされる注文リスト見ていると気が滅入る。注文するのは客とはいえ見ず知らず親子、カップルということが余計に気を落とさせる。

せめてとも思い、フライドチキンを揚げながら、今頃デートをしているであろう、この前代わってあげたバイトの先輩のことを考えた。

シフトの変更を頼んだのはこの日のためのプレゼントを買うためだったらしい。

おれが倉沢たちとマックで馬鹿話をしている間、先輩は卒論のために机にかじりついたりプレゼント資金を貯めたり会社の面接をしたりと忙しかつたらしい。

就職先も決まり、卒業したら今の恋人、今日のデートの相手と籍も入れるつもりだと仕事の合間に聞いていた。

一昨日のことだ。

「そんなに忙しいんじゃない、夏休み代わってもらって都合悪かったんじゃないですか」

申し訳なくなつてそう言つと、

「そうでもないよ。おかげでバイト代も増えたからプレゼントの予算も増えたし、この前もいきなりのシフト変更も東谷くんに代わってもらえたわけだし」

と笑った。

迷惑をかけたとばかり思っていたので、そう言われるといくらか楽

だった。

そうやって逃避の理由も兼ねてだが、人の幸せを願うことで多忙なバイトの時間を耐えた。

高校生の労働時間ぎりぎりでタイムカード切り、あまりの多忙さに見兼ねてサービス残業をし、22時半を過ぎたあたりでマフラーを巻いて裏口から出た。

すぐそばの植え込みの淵に橋川が座っていた。

「遅えよ」

不機嫌さを隠さずに言う。

「何やってんだ？クリスマスに彼氏にふられてやつあたりにきたのか？」

「んなわけねーだろ」

立ちあがると、マフラーを巻きなおす。

「あいつは非リア充組で集まって『世のカップルが爆発するように呪う会』をやるんだって」

付き合ってること隠してるんだからしょうがないでしょ。

表情を出さず、何事もないように言う。

「てゆーか早く出てこいよー。着替えに20分とか、かかり過ぎでしょ」

「年末のシフト確認してたんだよ」

そこで気づく。

「ん？何で20分前にあがったって知ってたんだ？」

「20分前まではファミレスの中にいたから。店員さんにアルバイトしてる東谷って人の友達なんですけど、上がったら教えてくださって頼んだら教えてくれた」

「東谷は二人いるはずなんだが」

二つ年上で柔和な東谷さんを思い浮かべる。

「店員さん、目つき悪い方って言ったら分かったよ」
なるほど。

「で、何でこんな寒い中八チ公みたいに待ってたんだ」

「だって中からじゃ裏口見えないじゃん」

「そうじゃなくて、何で待ってたか」

「あ、そっち？」

「そう」

「この前の手紙のことだよ」

淡々といった。

何も感情を込めないようにしているのが分かった。

「やっぱり手紙のこと、知ってたのか」

「やっぱりって？」

「いつだったか掃除のとき、手紙のことをお前に話したよな」

「うん」

「そのとき、おれは呼び出されたとは言ったけど、体育館裏には言ってなかったから」

「間抜けな火サスの犯人みたいだね、私」

間抜けな顔で笑う。

「あ、封筒の用意までしたのはそうだけど、用があるのは私じゃないよ」

「まー、そうだろうな」

こいつそんな性格でもないし、随分と一途な彼氏もいる。

「今、店の中で手紙の中身を書いたコが待ってるよ。東谷のことだからだいたい展開は読めてると思うけど」

はあ、息を吐くと白い靄が漂って消えた。

「これからアンタ、告白されるんだよ」

「へえ」

いやな予感はしていた。

「何、『実はあんたはうちの子じゃないのよ』ってか」

「そういう告白じゃない。マジメに聞けコラ」

「まじめもまじめ、大マジメ」

おれのマフラーをはぎ取り、よく冷えた手でおれの首を頸動脈に沿

つて押さえる。

鶏の断末魔のような声を上げるおれを睨みながら橋川は言った。

「こんなに寒くなるまで、そんな冗談言うために待つか？ いいからいつて来なさい」

「えー、自分のバイト先で告られるとか公開処刑じゃん」

歯をがちがち鳴らしながらそう粘るが、

「もっかいいつとく？」

とオペを始める医者みたいに橋川が白い手を挙げる。

これ以上体温を奪われては命に関わるので、大人しくおれは従うことにした。

「アンタは告白されんの。恋の方の」

恥ずかしいセリフを繰り返す橋川。

「百歩譲ってそうだとしよう」

「嬉しい癖にー」

「期待して出てって好みじゃなかったらガックリくるだろ」

「それは大丈夫。あの子超絶に可愛いから」

「女の可愛いのはあてにならないってことぐらい知ってる」

マフラーを取り返して巻き、肩をあげて口の上までうずめる。

それにいつかみたいにまた泣かれるのは勘弁だった。

「お節介だつて分かつたうえで色々、アドバイスはしたんだけど」

そこで一旦区切り、瞳の奥に入り込むような眼で射抜く。

「もしかしたら何も言えなくなるかもしれない。そしたらアンタから言つてやつてよ」

いつもみたいにならずばつとき。

頼むというよりは祈るように口にした。しおらしい態度だ。

上岡といい、築瀬といい、おれの性格は人斬り包丁みたいに思われているのだろうか？

「それじゃーよろしくー」。

そんな女々しい態度から一転して

一応、

「夜道、危なくねーか？」

と声をかけたが、

「あー大丈夫。今だけあいつ呼んでるから」

わざわざおれを震わせるためだけに手を温めるなんてこいつ馬鹿じやないか。

と思っていたが、どうやら温めくれる相手がいたらしい。

確かに反対側の歩道に橋川の中学から付き合いの彼氏、倉沢直斗の姿が見えたのでそのまま見送った。

店に戻り、正面から入ると橋川におれをリークしたであろう同僚がにやりと笑った。

無意識に睨んでしまったが、こんなことをしているから目つきが悪くなるのだと気づき、さっさとレジを抜けた。

橋川に指示された、ちょうど通りからもレジからも見えない位置のボックス席を覗き込む。

が、誰もいない。

別の席かと思い、喫煙者席、二人組席、トイレの方、と見渡すがそれらしい人はいない。

ドリンクコーナーを見ようと後ろを向く。

そこでやっとこのボックス席に座ろうとしている人と眼が合った。

両手で陶器のカップを持つ、びっくりした表情をした中瀬有里だった。

「寒いな」

店から出て、少し遅れて隣を歩く中瀬を振り返らずに言う。

バイトの同僚に冷やかされても腹が立つので、店の割引券で安くしてもらい店を出た。

さつき店に戻ってきたときはにやにやしていた同僚も、こっちの気まずい雰囲気を感じたのか、普通の客と同じように淡々とレジを押した。

何も言い出さないのでも中瀬の家の方へ足に向けた。

星もなく、冷えた夜空。

クリスマスの装飾。

静寂という存在感さえ感じる沈黙。

「久しぶりだね」

「あー」

「こっちは帰るの」

「あー」

黙る。

「最近、あんまり話してくれなくなった」

「いや？教室でも普通に話すじゃん」

「違う。最近はよそよそしくなった」

「気のせいじゃね？おれはいつも通りだ」

「そう…そうなのかな」

「そうそう」

おれはできる限り平静を保った。

「本当に気のせいかな」

「そうだって言ってるじゃん」

「そう…分かった。私の勘違いなんかで呼び出して、ごめんね」
しおらしく謝る。

「…まあ、おれにも色々あったんだよ」

その様子に耐えられず、本当の事を言ってしまう。

「話さなくなったのにも」

顔を上げる。

「色々って？」

「色々は色々だ。長くなるから割愛」

「長くなってもいい。教えて」

珍しく、やたらと食い下がる。
うつとうしい。

「黙秘権を行使する」
うなだれる中瀬。

こういう態度に弱い。

心が痛い。

洗いざらい言って楽になっちまおう。

はあ。ため息は白い息となる

「おれはその昔、お前が好きだったんだよ」

中瀬と初めて話したのは小学四年の給食の配ぜんときだ。

当然のように出席番号順から始まる給食の配ぜん係をしていたおれに

「お肉は少なくして」

と言った。

一応好き嫌いしちやだめだと、は言ったものの、小学生男子とい
うのは基本肉食獣なので、他のやつにやるために少なめにしてやつ
た。

それだけなのに、誕生日を祝われたみたいに

「ありがとー」

なんて言って笑顔で器を受け取った。

別に脳細胞が桃色の上岡みたいに一目ぼれしたってわけじゃない。

ただ、それから中瀬の姿がなぜか視界に入るようになったり、中瀬
と話した内容をなぜかよく思い出すようになったり、中瀬の声だけ
なぜか雑音の中でもクリアに聞こえるようになったりしたただけだ。
別に一目惚れをしたってわけじゃない。

それから中瀬有里と話をすることが多くなった。
いや、話しかけることが多くなった。

おれはよく言う落ち着きのない子供だと言われていたし、短気な方だったからよく親とも友達ともけんかもした。そんなおれとけんかするくらい周りの奴も子供だった。

それとは対照的に彼女は物静かだった。十歳の割には大人びていた。あまり笑わない子供だった。

たまに作り笑いを笑顔だという先生もいた。

自分のこと話さず、おれの話静静地に聞いてくれた。そんなところを子供なりにおれは尊敬していた。

たまに彼女から出る具体的な話題は、本や料理の話だった。

料理のことを話すときは年相応に無邪気な表情をしてくれるのが、震えるくらい嬉しかった。本のことは難しかったが、彼女に知らないように後で読み、彼女の言いたかったことを一部でもいいから理解しようとした。

おれと違い他人への配慮ができる彼女は、人が多い場所だと特に気を使ってしまいうらしいから、できる限り一人でいるときに話しかけた。

もちろん小学生だからたまにからかうやつもいたけど、それは本当にそいつらがおれのことを羨ましがったことだと分かっていた。今でもそう思う。

中学に入って彼女と話す機会が減った。

クラスも違ってしまったうえ、あまり学校に来なくなったからだ。周りに気を使ってしまふ彼女のことから、気疲れしてしまったのだろうと思う。

2年の2学期の終業式、おれは所属していた部活の教師から中瀬の家へプリントを届けに行く聞いた。

おれはその教師の『もの分かりのいい先生』を演じているところが大嫌いだっただ、そのもの分かりのよさにつけこみ、プリントを代わりに届けに行くことにした。

彼女のマンションの部屋に上がるときはさすがに緊張して靴を脱げ

なくなつた。

平常心を保つために、母親にばれないように深呼吸をしてから廊下を進んだ。彼女は相変わらず落ち着いたもので、それがいくらか緊張を溶かした。

話すのは母親ばかりで、彼女は相変わらずあまり笑わなかったけど、母の料理教室で手伝いをしているときの話をすると、やせ形の彼女も血色を良くし、それは嬉しそうに言葉を紡いだ。

そんな彼女と一緒にいるときは自分の頬が奇妙につりあがらないようにするのに苦労した。

それからしばらくして、彼女からおれが以前通っていた塾に通いたいの電話をもらった。

しばらく彼女はそこに通うようになった。

卒業後、高校はばらばらになると思ったが、同じ高校へ進むことになった。

高校生になると彼女彼氏作る奴がやたらと増えた。

おれはそういうのに疎いので実感は湧かなかったが、割と他人を見ている倉沢が教えてくれた。

彼女との関係を深く考えたことはなかった。

人格的にも優れている彼女に恋人ができるのは時間の問題だろうと思っていた。

どうせなら自分が知ってるやつならいいと思った。

明るい奴や優しい奴や面倒見のいい奴とか。

そっちの方が一つで二人分祝えるからだ。

だが実際にそういうやつらを目の前にしてみるとそんな謙虚な気持ちはあとかたもなく吹き飛び、いても立ってもいられなくなった。

しかし、高校に入ってバイトも始めたのでなかなか時間も取れない手をこまねいている間に夏休みになった。

帰り道、たまたま中瀬を見つけた。

中瀬は夏休み中、例の塾で手伝いをするらしかった。おれは送るといふ名目でよく一緒に帰ることになった。

おれが抱いている気持ちをも、中瀬も抱いていけば。

それを夏中に確かめるとしようと、そしてだめだったらきっぱり諦めようとも決めた。

だが、夏休みに入ってからの中瀬の様子を見て、おれは考えを改めた。

中瀬は塾でよく笑うようになったのだ。

「おれの前じゃ滅多に笑わなかったし、口数も少なかった。自分から話しかけてくれることは一度もなかった。おれの話聞いてばかりだった。相槌さえも微かだった。でも、塾位の連中や子供相手でも変わらない笑った顔を見ると分からなくなった。おれはずっと作り笑いだと思っていたけど、実際は違うんじゃないかと思うようになった」

そのことを考えたのはバイト中のことだった。

大学生の同僚が気付いて声を書けるまで、調理台に手をついたまま、凍らせたように動かなかったらしい。

「もしかすると愛想が悪いのはおれに對してだけか？と思ってな。

じゃあ仕方ないってことであんまり親しくしないようにしてたんだよ。まあ、諦めたってわけだ」

だから距離を置いた。

面倒見のいい倉沢や人のいい築瀬に気付かれないように、さりげなく。

「あーあ、もういいか？寒いしさつさと帰ろうぜ」

そこまで一気に話すと、真っ暗な夜にぴったりの静寂がその場を埋めた。

寒い以上に、これ以上会話を続けるのが辛かった。

中瀬の口から出る言葉が何であれ、聞きたくなかった。
こんな暴露話をした以上、もう終わりにしたかった。

「ごめんなさい」

中瀬は、重そうに口を開いた。相変わらず、抑揚がない。

「でも、最後に」

おそらく寒さのためであろう、華奢な体が震えていた。

「最後にひとつだけ訊きたいことがある」

「…何」

最後。

あーあ、やっぱりそうなのか橋川のやつ適当なこといいやつて。
まったく関係ない相手を内心毒づきながら言葉を待つ。

「もう」

「あ？」

「もう、今までのように話ができない？」

そんな生殺しのようなことしないでくれよ。

そう頼もうと思った。

が、中瀬の目を見てまったく関係なく悲鳴が出そうになった。

今にも泣き出しそうなくらい目に涙を溜めてこつちを見ていたのだ。

「今更言い出すなんてずるいけど、分かってるけど、訊きたい。もう」

もう、今までみたいに話せないの？

静まり返った夜の下。

そうでなければ消えていまいそうな、かろうじて聞き取れる小さな声で言った。

その後は、再び闇と同化するような沈黙が訪れた。

相変わらずの静寂。

だが、さっきと静寂の質が変わっていた。

目の前でまた俯いてしまった中瀬がおれの返答を待っているのだった。

「今気付いた」

自分で自分に言い聞かせるように。

冷静になって、喋れなくなる前におれは口を動かした。

「未練がましいことに、未だにおれはお前が好きらしい」

今喋るのを止めるときつと無理だな。

そう考え、続けた。

「さつきは諦めたって言ったけど、本当のと言つと、諦めてる途中なんだよ。お前のさっきの質問に答えると、今までみてえに接するのは多分、むりだ。かといってこのまま変に距離を置くのも中瀬にも悪いし、おれらしくない。だから、諦めるためにも、ひとつ区切りのためにも、訊きたいことがある。なあ中瀬、お前が良ければなんだけど」

支離滅裂なことを言ってるのは分かってる。

できる限り、反動でダメージが残らないように。

心をこめないようにして、分かりやすく伝えた。

「おれと付き合わねえ？」

風はない。

音もない。

星もない。

返事もない。

時が止まったと言われても、おれは信じただろう。

それくらいの静寂のあと、中瀬は音もなく僅かに。

頷いた。

「それは、いいってこと？」

また頷く。

「…そうかい」

一拍。

二拍。

三拍。

「あー…じゃあどうぞよろしく」

拍子が抜けるような間の後、ようやくおれは言った。

さっきの効用がうそのようで、血が沸き立つとか、背筋を駆け抜けるようなものはなかった。

ただようやく終わったなあ、とだけ思った。

だが、涙をすすする音をしてまた動揺することになる。

中瀬が声を出さずに泣いていた。

「お、おい。大丈夫か」

慌てて距離を詰める。

なんかまずいこと言った？断りたかったか？命令口調になってたか？頭の中でそんなネガティブな疑問が駆け抜けた。

だが、

「違う…そうじゃなくて…ありがとう…ごめんね…ごめん…でもありがとう」

とか言いながら両手で涙を拭うばかりで泣きやむ様子はない。

ついさっき彼女となった中瀬の頭がおれの顎の下に来る。

周りを見渡すとだれもいない。

よく分からない本能とも好奇心とも庇護欲とも充足感とも危機感ともつかない気持ちに任せて、泣き顔を隠すように小さい頭を抱いた。腕の中で彼女は相変わらず泣いていて、その理由は分からなかった。だが、嗚咽交じりの声の中で、謝罪のことばよりも『ありがとう』という言葉が増えていたのが分かった。

こうしておれたちは付き合うことになった。

今にして思えば、よくできた話で納得いかないくところもあるが、おれは別に気にしなかった。

正しく言えばとある理由で気を回すことができなかった。

そのある理由を傍迷惑で、退屈で、おれが大嫌いな、惚気話ノロケにならないように気をつけて説明すると。

まあつまり。

一目惚れし一途に想い続け付き合うことになった可憐で優しく従順で愛らしい彼女とキャツキャツウフフいちゃいちゃベタベタでれでれするのに必死で他のことはどーでもよくなってしまったからだ。

中学生の中瀬有里のひとコマだ。

彼女は岩陰に生じた苔のようにひっそりと毎日を送っていた。

立ち姿はハンガーに制服をかけていると思うくらい痩せていて、手の甲は筋や血管がくつきりと見えるほどだ。日常での動き極端に少ないせいで皺も見つからない制服。

そこから伸びる生気のない首元は、乾いた藁を思わせた。

常に血が通っているとは思えないほど青白い顔をしている。

目は常に俯いていて、その見えない暗い井戸を覗き込んでいるようだった。

僅かに出る感情の起伏は木の洞が動いたような印象を相手に与えた。当然、その声も洞から届くような貧しい声だった。

小学四年の時、彼女の父と母が離婚した。

11月の誕生日で十歳になった年の春だった。それを機に母の地元に引っ越すことになった。

母の両親、つまり祖父と祖母は母が幼い頃に亡くなっていたので、旧姓に戻すことはなかった。

家族が減り、環境が変わり、彼女は一人でいることが増えたが、心配はいらなかった。

控え目で内気な性格の彼女は元々一人が好きだった。

静かに本を読んだり、料理のレシピを考えたりした。

感情を表に出すのは恥ずかしいというよりも、苦痛だった。

話す言葉は辞書から抜け出したよう抑揚がなく、声は論文を述べるように無表情だった。

だが、そんな彼女に母親は、

「友達はできた？」

とよく訊いた。

両親を早くに亡くしていた彼女の母自身、幼い頃は友達が頼りだったのだ。

母親も仕事に出ていることが多かったから、一人でいると辛いのではないかという配慮からの言葉だった。

しかし、それは中瀬にはプレッシャーに感じた。

友達がたくさんいなければ母を不安にさせてしまう。

そう考え、時計台の秒針を数えるように神経を張り詰め、他人の顔を窺い、本来の自分からは程遠い、気のきく優等生を努めて過ごした。

中学校に入るまでは何事もなかった。

中学校2年の時、彼女の所属する委員会の先輩が中瀬へ好意を抱いているという噂が立った。

本当だったかもしれない。嘘だったかもしれない。

しかし、彼女に好意を抱いた先輩は、彼女のクラスメイトが好意を寄せる人物でもあった。

そのクラスメイトはクラスの中心人物でもあり、噂を広げるのが上手でもあった。

いじめではなかったかもしれない。

ただ、彼女の周りで何かが少しずつ軋んでいった。金属が疲労し、点々と赤茶色の錆が浮いていくように少しずつ変わっていった。

グループ学習のときに彼女だけが残ることが多々あった。

席の前から回されたプリントが一枚足りない。

学校行事のたいせつな内容が伝えられない。

体育館から教室へ戻るときにうわばきが見つからない。

掃除が終わると周りの机が少しずつ離れている。

班の意見をまとめるときに自分だけ求められない。

考えすぎといえば考えすぎで、気のせいと言えば気のせいなのかもしれない。

ただ、人の目を過敏なほど気を配っていた彼女を萎縮させるのには十分だった。

それでも僅かな変化と共に毎日学校生活を過ごした。

短いと感じた休み時間は授業の開始が耐えきれないほどになった。

疎ましいと思っていた体重が溶けるように減っていった。

朝起きると鉛の膜が覆っているように気怠さも珍しくなくなった。

ある日、靴を履くために玄関の段差、框に座ったまま立てなくなった。

膝から下の部位が体を支えるものではなく、形だけの陶器になったようだった。

冬休みを2週間後に迎える日だった。

彼女が休んだ終業式の日、東谷が家に学校の大事なプリントを届けにきた。

浅井先生は部活の顧問で割とよく話すんです。小学校が同じだって言ったら頼まれたんで。

浅井という教師は彼女の担任だ。

玄關で対応した母が言うには東谷はそう言っていたらしい。
本当かどうかは知らない。

ちょうどそのときは家で母とチョコレートケーキを焼いていた。

この頃、彼女の母は再婚した。

中瀬が学校にいなくなっただのを機に、彼女の父が申し込んだのだ
った。

そうしてできた時間を、中瀬の母はできる限り娘に時間を割いた。

東谷はプリントを渡しにきただけだったが、母が上げた。

ケーキを食べる人が必要だったというもある。

彼女の母はできたら学校での様子を聞こうという腹積もりだったの
かもしれない。

とにかく彼女の母は新しい家となった3LDKのマンションの部屋
に東谷を上げた。

普通、年頃の異性の家には不必要なくらい敬遠するものじゃないか。
彼女は思ったが、甘ったるい匂いの廊下を歩く東谷に緊張する様子
がなかった。

どちらかというと初めてマンションの部屋入るのを緊張しているよ
うだった。

それを見て彼女も警戒するのが馬鹿らしくなった。

東谷はよく味わっているのか、チョコケーキを角砂糖程度の大きさ
に切りながら口に運び、そのあとに必ず紅茶を飲んだ。

「こんなにつけー高層マンションに住んでる友達がいるとは知らな
かった」

「そんなに甘くないから食べやすい」

「こんな紅茶らしい紅茶飲むの、初めてだ」

そんなどうでもいいことを喋った。

そのときの彼女からすると東谷はよく舌が回る友達だという印象だ
った。

東谷とは中学に入ってからずっと別のクラスだったが、時折、話を
した。

クラスでの事情を知らないため、彼が変に気を使うこともなかった。東谷は彼女が無反応だろうと、無愛想だろうと構わずに喋った。そのために、彼女も興味を持って耳を傾けてはいたが、小さな反応しか示さなかった。

元々普段通りの無愛想な性格で接していた。

苦手な相槌を打たなくとも話し、僅かな反応でも感じ取ってくれる東谷との会話は気が楽だった。

「中瀬はよくこうやって親とケーキ作ったりするの？」

一仕事終えたみたいに食後の紅茶を飲む東谷が、中瀬に尋ねた。

「小さい頃はやってたけど、最近また。私も家にいることが多いし、お母さんも前より家にいる時間が多くなった」

中瀬は「家にいる」というところを暗くならないように努めた。

中瀬の母は再婚してから家のいることが多くなった。

伴侶を得ることで経済的な余裕ができたというのもあるが、学校へ通えなくなった娘とできる限り一緒にいたいという考えと、両親の離婚というのを経験させてしまった負い目もあった。

「だから、自然と親と過ごすこと長くなる」

「へー、男子より女子は親をうざがならいのかな」

不思議そうに言う。

「東谷くんは親が鬱陶しいと思うことは？」

「別に。うざがると機嫌悪くなって仕事行かない！とか言いだすから」

「え、二人とも？」

「いや。うち、親一人だから。母親の」

そう言っただけで自分の頭の中を探るみたいに眉をひそめた。

「私生児だっけ。何か、親父が父親になれなかったっけ」

クラスの友達が言う昨日テレビのことでも言うように自分のことを話した。

母親は機嫌が良い日はもう会わないであろう父親のことを褒めること。

その話が惚気話にしか聞こえないのでうんざりすること。

父親はとある事情で今の母と結婚することができなかったこと。

東谷はそのきつとそいつが既婚者だからだと思っていること。

でも母親が子供だけでもと思いつたのが東谷であること。

そして、自分の存在自体父親は知らないということ。

「だから、ちよつと前まで中瀬と同じだったんだな」

そういつてまだ慣れない様子の紅茶のカップを置いた。

母が席を外し、食器を洗い終える前に終わってしまうほどの時間で語った身の上話だった。

帰り際、母親が、またチョコレートケーキを焼いたら食べに来てほしいと言つと、

「ありがとうございます」

と言つてばつの悪そうな顔をした。

冬休み中に一度、東谷は家にやってきた。

中瀬の母は東谷の事が気に入り、さらに先日聞いた身の上話をしたらとても興味を持ったらしかった。

「たまに『仙波じゅう塾』つてのに行くんで。そこは大学生や大人も多いから、それあるかも」

母が東谷の大人とでも物怖じしない様子を不思議に聞くと、そう答えた。

学校に行かない子供や、経済的に塾に行けない子が通っていると東谷は言った。

片親なのを気に掛ける近所の人がいて、その人の同情のこもった態度が意味不明だったが、話に出た塾はおもしろそうだったので行つてみたのがきっかけ、だそうだ。

中瀬自身、学校に行かなくなっても家で勉強はしていたが、成績のことは心配だった。

母もそれとなく気にしていたらしく、興味があると言つたら喜んで応じた。

電話で東谷に頼んでみると二つ返事で承諾した。
東谷に連れられてやってきたビルの2階に『仙波じゆう塾』はあった。

カーペットの上で壁にもたれて携帯をいじる子。

学校の給湯室のような机で本を読んでいる子。

一角の和室にねっ転がって問題を解く子。

それぞれが思い思いの格好をしていた。

勉強する場と聞いていたが、図書館の学習室のような殺伐としてぴりぴりした雰囲気はなかった。

年末には集会所を借りて、もちをついたりするよ、と東谷は言った。そんな、解放された場所にしばらく通った。

3年生になると少しずつ中学にも通うようになった。

以前のような気怠さも抜け、顔にふくよかさも戻った。

成績も持ち直し、中学校入学当初から描いていた普通科高校に進学した。

もう以前のようなプレッシャーはなくなり、休み時間は親しい友達とだけ過ごすようになった。

特に中学からの友達、橋川由奈とは多く時間をと秘密を共有した。

そのひとつに倉沢直斗のことがあった。

中学の頃から倉沢と付き合っていると中瀬は本人から聞いていた。

そのことを橋川が教えたのは口の堅い中瀬だけであり、当然、その愚痴を聞くのも彼女だけだった。

橋川は最近友達付き合いが多くなった倉沢がおもしろくないようだった。

「倉沢くんって、前に出るタイプじゃなかったのに、変わったから」
そしてそのことを同じく知る東谷と話した。

夏休みになり、中学時代通っていた塾に顔を出した帰り道だった。左右に並んではいるが東谷が一分前を歩いている。

「高校デビューってやつだと思う」

「そうか？変わった？そうか？倉沢が変わったって言うよりは、周りのやつの態度が変わったって気はするけど」

「周りの人の、態度」

アスファルトを見つめて歩いていた中瀬は東谷の背に視線を移した。「あいつは元々気がきくし、いいやつだよ。目立ちたがり屋や、前になるのか好きなやつがいたから、そいつらを思っであえてやらなかっただけだろ」

人の目が怖くてできなかったってチキンな一面もあるだろうけど、と褒めた分を差し引くように悪く付け足す。

「実際、そうしはじめたらちゃらしてるなんて言われ始めたみたいだしな」

倉沢の事を言っていたのに、ここだけ噂話を語るような口ぶりだった。

まるで、そう思っていないという風に。

そう訊くと、

「あー、前より明るくなったとは思っけど。かといってそんな変わったようには思えねえんだよ。その証拠にあいつはまだ橋川一筋だろ？あれで結構、誘惑多いみたいだぜえ」

あくまで、変わったのは周りの態度だ、と言う。

離れた机。纏わりつく鉛。待ち焦がれた金曜日。逃避した月曜日。中学時代がフラッシュバックする。

「嫌われたり、クラスで浮いちゃわないかとかいう心配はなかったのかな」

家族以外、味方がいなくなっちゃって心配は。

「はア？嫌われてもどうせすぐに卒業だろ、気にしてらんねーよ」
「東谷くんはそうだろうけど、」

他の人も東谷くんみたいに強くないと思うよ。私みたいに。

視線を再び落とす。

中瀬の腑に落ちない様子が気にかかったのか、中瀬の顔色を窺うと前言を言い直すように言う。

「あー、まあ仮に中瀬のいう高校デビューに失敗してハブにされた、としても」

引き寄せられるように顔を上げ、東谷の口元を見ようとした。

「あいつがクラスで浮ここうが沈もうが、構うやつが最低三人はいるんだろし」

歩調は変わらず、口調も変わらない。

「あ、二人か？まあいいや」

東谷は思い出すように上を向く。

そのあとには何も続かなかった。

駅が近づき、僅かだが周りに人がいなくなったとき東谷は足を止めた。

「中瀬には、」

そう言いかけ、口を空けたまま沈黙した。

だが言いたかったことを飲み込むように口を閉じ、

「中瀬にもいるだろ、そういう人」

そう言つて珍しく、へたな笑顔を作った。

心の変化は現実を挟み、伴い、相乗的に大きくなった。

並べたドミノ牌が少しずつ大きくなり、最後は見違えるようになった中瀬に辿りつく。

彼女は化粧に挑戦した。

ただ、同級生のようにすべてを作り変えるような化粧はいやだった。塾で得意だという大学生に助けてもらい、眉や目元などを中心にナチュラルに仕上がるように教えてもらった。

顔の表面だけの変化は、それ以上に自分の内面に大きな影響を与え

た。

怖かったコンタクトにも挑戦した。

同じ視力補正の道具を通して見たとは思えないほど、世間は違って見えた。

橋川には美容院を紹介してもらい、服と一緒に買いにいった。

着ている上から重ねられる服は、どれも今時風で恥ずかしかった。しかし、プロの店員と親友のふたりに勧められると断れなかった。

彼女自身、新しい服に身を包んだ時の気分の変化に驚きながらも呆れてしまった。

単純なことに、明るい色の服を着ると気分も明るくなったのだ。

「あと、そのしゃべりかたも気をつけた方がいいね」

塾で小さい子の世話を一緒にしているとき、橋川は言った。

「あんたの喋り方って、なんか怖い。たまにノーリアクションだし。私とかはいいけど、他の人は怖がるよ、機械じゃないんだし」

そんな忠告を受け、話し方も気をつけるようになった。

ただ、誰かの言われたように、小学校の頃のように過敏にならないようにした。

そんな彼女を、

「やっぱり有里は磨けば光るコだったんだね」

両眼を潤ませて橋川は言った。

ウエディングドレスに身を包んだ娘を見る父親みたいだった。

東谷は塾に来ることは減ったが、たまに会って近況情報を交換し合った。

ただ、東谷は誰もが驚く変わりようにも何の興味も示さなかった。服も変え、髪型を変え、入念に鏡に向かってても、東谷は特に触れなかった。

良い出会いがあると予言されていた日を寝過ごしてしまったような、言い表しにくい気持ちだった。

一番明解な言葉で言うとは残念な気持ちだった。ここまで言い表しにくい感情ははじめてだった。

2学期となり、中瀬を取り巻く環境は変わった。
中瀬自身はそれほど変わっていない。

自分の好きなように身だしなみ整えた。

橋川に言われた通り話し方に温かさを込めた。

相手のことを思って言葉を返すようにした。

他の人が当然のようにやっていることを当然のようにできるようになった。

以前のように怯えることなく、やれるようになった。

自らが変わったという実感はなかった。

ただ、以前より毎日が明るくなったとは感じた。

萎縮しなくても、気どらなくてもいい。

そう誰かから教わったような気がした。

2学期になっても、東谷とはいっても通り挨拶をし、今まで通りクラスで距離を置き、普段通りに過ごした。

だが、その距離に隔たりを感じた。

愛想笑いが増えた。よく姿を見失った。話す時は意図的に第三者を挟むようになった。

冬から夏にかけて昼間の時間が延びるように、少しずつ東谷との距離が開いていくように感じた。

明確な寂寥と確実な欠落感だった。

夜が明け朝日を迎えたら自分の影がなくなっていたのに気付いたような気持だった。

そのことを橋川に相談したのは商店街が赤や緑のクリスマスの飾りつけを始めた十一月の末だった。

どういうわけが生き生きしはじめ、話に乗ってきた。

そんな一番身近にいた橋川も、東谷が彼女から距離を置いているとは感じていないようだった。

それほどさりげなく、東谷の態度は変わっていた。

眼の色を変えた橋川は、東谷が距離をおくようになった理由をいくつかあげた。

きつと押してダメなら引いて作戦を取っている。

勝手に諦めている。

中瀬が人気者になつておもしろくない。

など、どれも東谷が中瀬に好意を寄せているとう前提の理由だったためだろう。

彼女は納得しなかった。

今まで、東谷の接する態度が自分と他人とで違ったことなど一度もないと、いぶかしげにする親友に懇切丁寧に教えた。

今度は橋川が納得しなかった。

直接尋ねてみるのが起死回生の案と言わんばかりに橋川は提案した。なぜ、手紙で呼び出す必要があるのかと反論すると、

東谷もこのクリスマススムードにあてられ、さすがに人恋しくなるはずだから、あわよければ付き合ってしまったえ、ベタな方が男はくいくはずだ、と無責任なうえに無根拠なことを力説した。

もちろん好奇心もあっただろうが、そんな賭けに出ても大丈夫だろうと踏んでのことだった。

その時は断ったのだが、結局、橋川は手紙を渡してしまった。

しかし、東谷は来なかった。

高校からの帰り道、彼女は深く安堵した。

距離を置かれた理由を知るのは、やはり怖かった。

優柔不断な自分を相手にする、さばさばした性格の東谷のことを思うと、思い当たる理由はいくらでもあったからだ。

その湯船にでも浸かった様に安心した顔を見て、本人以上に乗り気だった彼女も、今回は諦めざるを得ないと悟った。

仕方ないので、初詣にでも倉沢と誘い合わせてみようと、橋川は来

年に希望を託した。

終業式を終えたイブの日の夕方、中瀬は橋川たちと塾でのクリスマス会用のケーキを作った。

終業式のケーキのケーキ作りということで、中瀬は東谷がプリントを届けに来た日を思い出した。

あの頃とは随分変わった。

良くも悪くも。

そんなことを思いながらケーキを切り分けた。

「チョコが嫌いな人って生きる楽しみが半減しそう」
会を終えた後、指についたチョコレートクリームを舐めながら言った。

片づけのため、ケーキの皿を洗っていたときだった。

「東谷の不機嫌そうな顔の原因はそのせいに違いない。きっと糖分が足りてないんだ」

ひとりごとのように言った。

東谷はチョコレートが苦手なのかと橋川に尋ねると、直から聞いた話だけど、と隣で手を洗いながら言う。

「中学のバレンタインのとき、小さいけどチョコレートケーキもらったんだってさ。しかも手作り。その時に告られたんだけど、『おれがチョコ苦手なの知っててやってる？』って泣かしちゃって。」

まあ、ケーキは直と私がおいしく頂いたけど」

手を洗い終わるとケーキの皿を持ち、ついた泡に流水をあてた。

脳というのは中枢神経の主要部で、ほとんどの意識活動を指示している。

が、その中からはらっぱになった。

理由は訊かず、今までみたいに接してくれるように頼もう。

まったく、何も考えられなくなったあとに浮かんだのはひとつの衝

動的な行動を促す命令だった。

手を止めてしまったのを不審に思っただけ顔を覗き込んでいた橋川に、頭がまっさらな状態な今ならともかく、一人になった時に逃げ出さないように一緒にいてくれと頼んだ。

橋川は普段と打って変わって、何も聞かずに承諾した。

距離を置いた理由を知りたくはなかった。

思い当たる節はいくらでもあった。

だから。

イブの日、距離を置いた理由を尋ねるつもりはなかった。

理由を知るのは怖かった。

しかし、いざその場になると、話の流れ上、訊かないわけにはいかない。

いきなり、前みたいに接してくださいと頼むわけにもいかない。

そして、彼は嫌そうに教えた。

自分で自分の嫌いなところも長所として捉えてくれていた東谷に感謝した。

が、申し訳なさもあった。

元々気を回す必要のないほど身近な人の優しさに甘えていたこと。元々自分が悪いこと。

これで、以前のように接してくれなど、都合がよすぎる。

「ひとつ区切りのためにも、訊きたいことがある」

だが、そう言っただけ東谷は開いた距離を、自ら距離を縮めてくれた。

ただ、泣いた。

泣いている自分に動揺した。

そのとき何を言っていたかは覚えていない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3359s/>

短編・恋愛・オリジナル

2011年10月8日23時30分発行